

日本ナイル・エチオピア学会第12回学術大会・公開シンポジウム

「狩猟と戦いの起源」

日本ナイル・エチオピア学会第12回学術大会は、2003年4月19日（土）、20日（日）の両日、高知県土佐市民会館で開催されました。これは、昨年の前沢大会と同じく、学会と地方自治体が共催し、地域住民にも学会活動や研究に関心をもってもらうという目的で企画されました。

土佐市高岡町では、日本最古の殺傷痕・損傷痕を有する人骨（居徳人骨）が発掘されたと2002年に発表があり、一躍その名が広く知られるところとなりました。ナイル・エチオピア地域は、ご承知のとおり、会員諸氏によって化石人骨や遺跡の発掘、また戦いに関する人類学的研究が盛んにおこなわれている場所でもあります。こうしたつながりから、今回は赤澤威会員をコーディネイターとして、「狩猟と戦いの起源」と題した公開シンポジウムが開催されました。

ここでは、下記のプログラムの中から、講演記録をもとに5名のシンポジストのかたがたに新たに原稿を書き下ろしていただき、さらにパネリストの曾我貴行さんにも原稿をいただきました。

シンポジウム趣旨

赤澤威

人類学という学問が誕生して以来150年、その間、さまざまなテーマが取り上げられ研究されてきた。その中の一つに長大な人類史における「争い」「戦い」、ヒトの行動にみられる「攻撃性」に関する研究がある。そして、このテーマのメッカの一つが実は、当学会がフィールドとするナイル・エチオピア地域です。

そのような行動はヒトにもともと備わっている本能なのか。でなければ、いつどのような背景のなかで獲得されたのか。生存戦略としてどのような進化的意味があったのか。未だに議論の絶えないテーマです。そしてその解明は、今日の状況からして現代的意義があるかもしれません。

「争い」を窺わせる証拠を留めるわが国最古の人骨が見つかった当地土佐で、「争い」「戦い」の起源や歴史的背景の問題を世界的な視野で考えるために計画されたのが本シンポジウムです。

公開シンポジウムプログラム

日時：平成15年4月19日（土）

会場：高知県土佐市 土佐市民会館

主催：日本ナイル・エチオピア学会

高知県土佐市

後援：NHK 高知放送局、高知新聞社、

高知県文化財団埋蔵文化センター

13：20-13：30 「開会のごあいさつ」

森田康生（土佐市長）

13：30-14：00 「狩猟の起源を旧石器時代に探る」

赤澤威（国際日本文化研究センター）

14：00-14：45 「居徳人骨にみられる損傷痕の意味」

松井章（奈良文化財研究所）

14：45-15：15 「人骨からみた戦い—弥生人骨と居徳人骨」

中橋孝博（九州大学）

コーヒーブレイク（15分）

15：30-16：00 「実験考古学からみた弓矢の威力」

宇野隆夫（国際日本文化研究センター）

16：00-16：30 「縄文時代における戦争の動機と背景」

小林達雄（國學院大學）

16：30-17：30 総合討論

司会：赤澤威

パネリスト：松井章・中橋孝博・宇野隆夫・小林達雄・曾我貴行（高知県埋文センター）



シンポジウムオープニング風景

狩猟の起源を旧石器時代に探る

赤澤 威（高知工科大学）

シンポジウムをはじめるにあたってまず、ご協力・ご支援いただいた方々、関連の組織団体に対して心からのお礼を申し上げなければなりません。

本シンポジウムは日本ナイル・エチオピア学会と土佐市の共催であります。とはいいましても、このような形で実現にこぎつけられたのは土佐市及び当教育委員会のスタッフみなさんのご協力とご支援のおかげであります。学会を代表してお礼を申し上げます。

また、本シンポジウムの開催にあたって高知新聞社、NHK 高知放送局、高知県文化財団、同埋蔵文化財センターからの後援をいただきました。わたしどもの小さな学会として非常にありがたく、心からお礼申し上げます。

シンポジウムのコーディネーターとして私から、本シンポジウム開催の目的などを簡単にお話いたします。

開催の趣旨について

まず一つは、アフリカのナイル・エチオピアを主たるフィールドとする私どもの学会が、なぜ、当地土佐で標記のシンポジウムを計画することになったのか、この点を説明しておく必要があります。

科学的な人類学という学問が誕生して150年、その間、さまざまなテーマが取り上げられ研究されてきました。その中の一つに長大な人類の歴史における「戦い」の問題、その起源や歴史的背景、言い方を変えて、ヒトの行動にみられる「攻撃性」に関する研究を忘れる訳にはいきません。攻撃性という行

動の進化に関する研究であります。

この行動はヒトがもともと持っている本能なのか。そうでなければ、いつどのような背景のなかで獲得されたのか。それが生存戦略としてどのような進化的意味があったのか。これらは未だに議論の絶えないテーマであります。この問題の究明は、今日の国際的状況からして現代的意義があるようにも感じられます。

ところで、この問題に関する歴史的研究のメッカの一つが実は、当学会がフィールドとするナイル・エチオピア地域であります。さらにまた、学会長福井勝義及び本シンポジウムの学会幹事の栗本英世はそろって当問題に取り組んでいる人類学者であります。

その福井さんから、「戦い」を窺わせる証拠を留めるわが国最古の人骨が見つかった当地土佐で、「戦い」の起源や歴史的背景の問題を世界史的な視野で考えて見ようではないかとの提案があり計画されたのが本シンポジウムであります。

狩猟と戦いの起源について

以上の視点にたってもう一つお話しておくことがあります。それは、「狩猟」と「戦い」が併記されているシンポジウムタイトルについてであります。

今回のシンポジウムは、当地で発見された居徳人骨に焦点を当てることとなりますが、そのバックグラウンドとして、最初に触れておきたいことがあります。

それは、人間社会における争いや戦いを過去に遡って、その起源や歴史的背景を探っていきますと、目的は違いますが人類の歴史における狩猟の起源とその歴史的背景との関連性をさけて通れないということであります。その視点にたって、争いや戦いの起源、それと狩猟との関連性について考えてお

くことが必要ということでもあります。

結論をまず申し上げておきます。自然界から動物をエネルギー源として確保するヒトの行動は、具体的な証拠に基づくかぎり三段階を経て発展し、その最後の段階で争いや戦いの証拠が現れるということでもあります。

最初の段階：ヒトの誕生から 20 万年前の人類まで

600 万年以上前に登場したアフリカの猿人たちから 100 万年以前に出現するジャワ原人などは、ばらした獲物を口から血をしたたかせながら骨までバリバリ噛み砕く、そういう肉食人というイメージで語られることが長らく続きました。このような初期人類の遺跡を発掘したとき、彼らの食生活を物語るもっとも目立つ証拠が動物の骨だったからであります。

しかもその骨のなかには、表面に石器で肉を切り取ったか、削ぎ取った際についた傷（カットマークと呼ぶこともある）をとどめる例があり、それが肉食の証拠とみなされ、それが主たる食資源であったと想像されることになったのであります。すなわち、初期人類は優れたハンターであり、エネルギーの多くを動物資源から摂取していたと想像されることになったのであります。

ところが 20 世紀も後半になって、初期人類の遺跡遺物、とりわけその堆積物を見直してみると、初期人類は常に食肉獣におびえながらこそこそ逃げ隠れしながら生きていた。しかもしばしばその餌食となるか弱い生物であり、必要とするエネルギーを肉から日常的に入手できる優れたハンターとはほど遠い存在であった、というのが真の姿と語られるようになったのであります。

では初期人類の遺跡で発見される骨はどのように説明すればよいのか。おそらくその多くは食肉獣の食べ残しであったり、あるいは自然死した動物

を偶然入手して食べた残りかすであったのであります。骨の表面に残るキズはたまたま入手した獲物を解体する際についたものであって、日常的な狩猟活動を裏付ける証拠とはならないことになりました。そうなると、初期人類の主たるエネルギー源は植物資源となるわけです。

そして、植物を主たる食料源とする生活を想定しますと、かれらが誕生し、その後、数百万年もかけて進化を繰り返すことになる熱帯・亜熱帯域は、エネルギー源に恵まれた場所であったこととなります。

そしてこの時代、彼らの社会で闘争、殺戮が存在したか。それを裏付ける証拠は見つかりません。

狩猟のはじまり：20 万年前から 4 万年前

4 万年前、ネアンデルタールに代表される旧人の遺跡でもっとも目立つ遺物の一つがやはり動物化石であります。しかもその保存状態は、偶然手にした獲物の残骸が堆積したものとは到底考えられないほどに大量であり破損の状況も規則的であります。以前よりも明らかに肉食が日常化していたと考えられるわけであります。言い換えると、主体的な狩猟が始まっていたのではないか。それをうかがわせるのであります。ただ、それを具体的に裏付ける証拠がなかなか見つかりませんでした。そしてついに一つの光明が見えました。

1993 年の夏、中東はシリアのウム・エル・トレル遺跡で石器の突き刺さった野性ウマの頸椎骨が発見されました。石器はネアンデルタールが残したムステリアンタイプと呼ばれるもので、ウマの第三頸椎の中心部まで深く侵入して止まっていた。石器は長さ 1.5 センチと小さく、破損していましたが、それを復元したところ、それは、全長約 7.5 センチの先端の尖ったポイントのほぼ中央部に相当することが判明しました (E. Boeda 1999)。

ポイントは、その射込まれている場所や射込まれ



図 1



図 2



図 3

た角度等から、立位の状態であったウマに対して後方上方から射込まれた、あるいは突き刺さったもので、その際の衝撃で破損したものだということまで判明しました。

このような形をしたポイントは、これまで、投槍器などの先端部に装着される石製の部品の可能性が指摘されてきた石器でした。それを裏付ける世界で最初の発見となったのであります。ウマの化石が見つかった地層の測定年代が5万から6万5千年前となり、同化石がネアンデルタールの行動の所産であることも確定しました。それは、ネアンデルタールが主体的に狩猟していたことを示唆する最古の証拠となったのであります。

獲物を主体的に捕獲するために初期人類が編み出した狩猟技術、それを維持するために考案されたさまざまな道具が、その後、いわゆる闘争と武器のルーツとなるわけですが、ウマの頸椎に突き刺さっていたネアンデルタールのポイントは武器の萌芽を暗示しております。

しかし、この時代の石器が武器として使用された証拠、言い替えば、彼らの間で闘争が存在したことを裏付ける証拠はネアンデルタールの社会では見つかりません。かれらの次に登場した新人ホモ・サピエンスの時代にも確証は見つかりません。

旧石器時代人は、食肉獣の狩猟・捕食行動からヒントを得て彼らなりの狩猟戦略を編み出したが、同時に別の教訓も得たのかもしれない。獲物の社会では、同じ仲間内（同一種の意）で一時的な争うことはあっても殺戮にいたるような破滅的な闘争には至らないということ。結局、初期人類は自らも殺戮を伴う闘争には思いおぼなかったのか、あるいはその必要がなかったのか。

本格的狩猟のはじまり：4万年前以降

人間と獲物との関係を窺い知る証拠のひとつとして旧石器時代に描かれた岩絵があります。岩絵が現われるのは、クロマニオンに代表される新人ホモ・サピエンスの時代、4万年前以降であります。その時代になって現れる岩絵のなかで狩猟を想像させるひとつが、フランスのラスコー洞窟で発見された約2万年前に描かれたバイソン像であります。矢らしきものが射込まれている状況から当時のバイソン猟を窺わせるものです（図1）。ただこの絵を、バイソンの前に描かれる人物を当時のシャーマンだったとみなし、狩猟の成就祈願と関連するシャーマニズム的な場面と解釈する研究者もいます。同じような傷つくバイソン像がフランスのニオー洞窟でも見つ

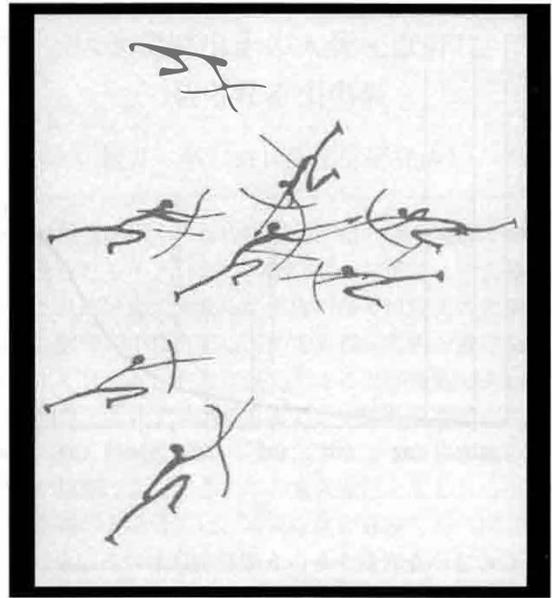


図4

かっています（図2）。

ところで、バイソンに刺さる矢がどのような方法で射込まれたのか。弓矢だったのか。いまやその状況を知る由もありませんが、それを明示する最古の例が、スペインのガスーリャ・ゴージで発見された岩絵であります。三人の射手がアイベックス（野生ヤギ）と対峙する狩猟絵です（図3）。描かれたのは約1万年前以降、旧石器から新石器への移行期に相当する中石器時代と推測されています。

4万年前以降、クロマニオンに代表される新人ホモ・サピエンスの時代の遺跡で発見される動物化石の堆積状況は、ネアンデルタール時代以上に肉食が日常化していたことを窺わせるものです。岩絵から推測される方法でもって獲物が恒常的に入手されていたことを窺わせます。ただ、狩猟はリスクを伴うわけで、その獲物の確保には集団で猟を行うといった方法も編み出されていたと考えられるわけです。集団猟、これもまた食肉獣の狩猟からヒントを得ていたのかもしれない。

では、このような弓矢猟や集団猟が形を変えて人間同士の争いの世界に登場するのはいつか。

争い・闘争のはじまりはいつか

人間と人間の闘争を窺わせる証拠もまた岩絵の世界で見ることができます。スペイン東部のモレリャ・ラ・ヴェリャ遺跡で発見された岩絵で、弓矢をもって対峙する数人の人物の闘争シーンだと思われれます（図4）。この岩絵の年代は上記の狩猟絵と同様に約1万年前以降と推測されています。

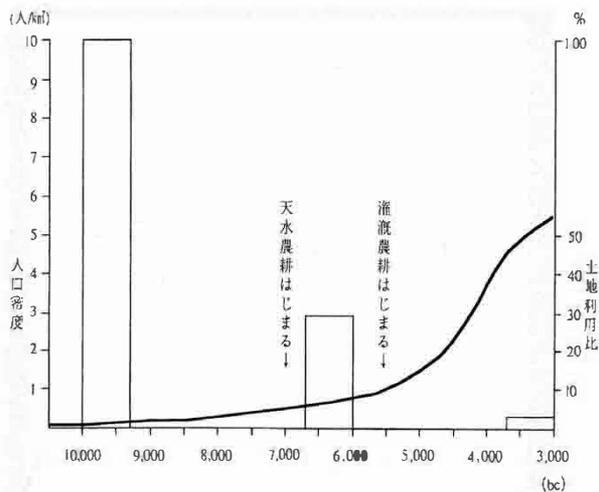


図5

このような岩絵から、人間社会における闘争・争いについて、それを過去にさかのぼっていくと、約1万年前の旧石器時代から新石器時代への移行期、いわゆる中石器時代には存在したことが推測されます。そして、それを裏付ける具体的な証拠がナイルの上流、ヌビアで発見されました。当地のジャバル・サハバ117遺跡で多数のポイントの刺さった戦死者の墓が見つかったのであります（Wendorf 1968）。その時代は、約1万2千年前、やはり旧石器から新石器への移行期に当たる晩期旧石器時代でありました。

遺跡を発掘したところ、次々と人骨が現れ、最終的に15メートル四方の発掘区画から58体の人骨が見つかりました。しかも、折り重なるように見つかった人骨も含め、その多くが同じ方向、同じ姿勢で見つかったのです。この多数の死体が自然に埋まったのではこのような状況にはならないでしょう。その状況のいくつかを見てみます（Wendorf 1968; 高橋1993）。

101号、102号、103号と命名された3体の人骨は、約5歳の子どもを挟んで、成人の女性が2人、同じ姿勢、同じ方向を向いて折り重なっていました。次は20号、21号と命名された成人男性です。かれらも同じ姿勢、同じ方向を向いていました。他の人骨も同じような状況を示していました。しかも折り重なるように埋葬されているにもかかわらず、骨格がほとんど乱れていません。ということは、この人たちはおそらく亡くなってすぐに、丁寧に扱われ、埋葬されたに相違ありません。

以上のような状況から、この遺跡を発掘した研究者は、彼らは意図的に埋葬された人たちであり、こ

の遺跡は集団墓地だったと考えたのであります。では彼らに何が起こったのでしょうか。実は、それを考える鍵が同時に見つかっています。見つかった人骨の多くは石器を伴っていた、なかには骨に刺さっていた例もありました。

先ほどの101号、102号、103号の3体の人骨からは、石器がいっしょに見つかっています。子どもには石器は伴っていませんでした。102号には石器が1点、また103号には2点あり、そのうちの1点は骨に突き刺さっていました。20号、21号人骨といっしょに見つかった石器は、その数の多さに驚きます。なんと20号には6点、21号人骨には19点の石器が伴っていました。44号という女性には21点の石器が伴っていました。これらの石器は、骨に刺さっていたものもありましたが、そのほとんどはもともと体に刺さっていたものが、埋葬後に体が朽ち果て、それぞれの人骨といっしょにそれに接して埋没したと考えられるものでした。

以上の状況からいろいろなことがわかりました。争いの主役は成人男性だった。ただ、先ほどの44号の例もあり、女性も戦闘に加わっていたかもしれません。戦死した彼らを、生き残った人たちが、おそらく巻き添えて死んだ子どもや女性たちといっしょに丁寧に埋葬した。時代は約1万2千年前、旧石器時代の最後です。先ほどの岩絵が描かれた時代とだいたい同じころになります。

長大な人類史の中で、主体的な狩猟、つまり自ら獲物を捕るといふ狩猟は、20万年前のおそらくネアンデルタールの時代には始まっていました。その狩猟具として考案された石器が、武器として利用され、そして争いが起こったのが、旧石器時代のおしまいです。1万2千年ぐらい前だろうということです。

結論：なぜ争いが始まったのか

最後になぜ争いが始まったのか、ということについて、1つの仮説を提示して、締めくくりとします。

参考にするのは、アメリカの人類学者、ケント・フラナリーがイラン南西部でおこなった研究です（Flannery 1968）。図はその論文に掲載されているものです（図5）。約1万年前から3千年ぐらい前までの調査地域の人口の推移と、その間の土地利用の変化を示しています。横軸が年代、時代を示します。人口密度は遺跡数から算出され、曲線がその時代の推移を示し、各時代の人口密度は左側の縦軸の数字で読みとります。3本の棒は、各時代の遺跡分

布から算出された土地利用の程度を示し、1万年前、6千年前、3千年前の状況が表されています。

この図から、人間社会における争いの原因の1つを読み取ることができる、と私は考えています。技術がだんだんと進歩する、それによって生活は安定し、定住生活が進む。こうして人口はしだいに増加する。ところが、人間が利用した土地は、人口の増加に反比例するように縮小しています。言い替えば、利用できる土地が狭くなっていると言ってもよいでしょう。

具体的な数字で考えてみましょう。1万年前と3千年前とでは、人口は60倍になっています。ところが、その間に人間が利用した土地の面積が激減しました。1万年前を100としますと、人口が60倍になった3千年前は、なんとわずか3パーセントです。人口が増加したにもかかわらず、人間が利用する土地は激減した。農耕社会とともに、それに適した土地は限られ、その限られた土地の生産力に対する集中的、集約的な収奪、それが農耕であります。引き続き人口の増加に見合う生産力が期待できなければ当然、土地を巡って、集団の間に摩擦が生じ、争いの原因となるとということが予測できます。

農耕社会以降、集団の間の摩擦や争いが恒常化します。ところが、その問題はすでに旧石器時代のおしまいごろに始まっていたらしいのです。この土地と人間のこの閉塞的な関係は、今日ではますます深刻になっているということ、最後に警告しておきたいと思います。

引用文献

Boeda, E., J.M. Geneste, C. Griggo, N. Mercier, S. Muhesen, J.L. Reyss, A. Taha, and H. Valladas (1999) A Levallois Point Imbedded in the Vertebra of a Wild Ass (*Equus africanus*) Hafting Projectile. *Mousterian Hunting Weapon*. *Antiquity*, 73(280): 394-402.

Flannery, Kent V. (1969) ●riginal and ecological effects of early domestication in Iran and the Near East. In P.J. Ucko and G.W. Dimbleby (eds.) *The Domestication and Exploitation of Plants and Animals*, pp. 73-100. Gerald Duckworth.

Wendorf, Fred (ed.) (1968) *The Prehistory of Nubia*. Southern Methodist University Press.

高橋龍三郎 (1993) 「ナイル河流域における後期旧石器時代の墓制と社会」(上)『文学・芸術・文化』5(1): 137-164.

居徳遺跡出土の人骨・獣骨に見られる損傷痕

松井 章 (奈良文化財研究所)

居徳遺跡出土の骨の中には、他の縄文遺跡で普通に見られるイノシシやニホンジカに混じって人骨が含まれていた。それらの人骨の多くは成人の大腿骨で、獣骨の中に混じっていても長くても真っ直ぐなのでよく目立ち、容易に選別することが可能であった(図1¹⁾)。人骨を並べてみると、いずれも関節が欠けており、軸(骨幹)の部分にさまざまな傷があることが観察できた。その中の成人女性と思われる小柄な左側の大腿骨には、特異な傷が存在した(図2²⁾)。つまり、この大腿骨の膝より少し上の部分に、正面から裏側へと一つの穴が貫通しており、その穴の断面の形状が半月形で、それはニホンジカの中手骨、中足骨を素材とした骨鏃であることが容易にわかる。別の古墳時代の遺跡から出土した骨鏃の実測図と居徳人骨の貫通した穴を比較すると、断面がそっくり同じことがわかる(図3³⁾)。しかもその表側の穴の周囲は内側にめくれ込んでおり、骨が弾力のある時に貫通したこともわかる。さらに骨鏃が大腿骨を貫通して裏側を抜けていくときには、周囲の骨を吹き飛ばしている(図4⁴⁾)。つまり、この女性は正面上方から骨鏃を装着した矢によって左膝を射抜かれたことを示している(図5⁵⁾)。このような傷の特徴は、法医学で証明されているピストルの弾丸に打ち抜かれた骨の特徴と合致する。弓矢がピストルに匹敵するほどの破壊力があるとは信じられない思いがするが、もう一例、弓矢の威力を証明する顕著な例がある。それは同じ地点から出土したニホンジカの肘から下の骨、橈骨の上部に穴が開いていた(図6⁶⁾)。断面は、やはり半月形で、矢は後から進入し、骨の前面を裏から突き上げて瘤をつくっている(図7^{7,8)})。これは逃げるシカの後から弓を射て、前脚に命中させたことを示す。この場合、矢は抜けずに突き刺さり、このシカは身動きできず、捕らえられただろう。この矢で膝を貫かれた女性の大腿骨の股に近い部分にも、太ももを切断しようとして、切断できなかった傷が残る。その傷は地下水に含まれる鉄分と骨のリン分とが化合した藍鉄鉱(ピビアナイト)という結晶が傷に沿って析出しているため、傷が長軸に斜めに入っているのがよく見える(図9⁹⁾)。この傷は単に鋭いだけでなく、一気に大腿骨の4分の3

周くらいまで切り込んでいるが、一刀両断にならなかったため、刃物を抜いたときに残っていた部分の弾力で傷がふさがり、骨の裏と表に線状の切り傷が残ったのであろう（図10¹⁰）。

もう一つ、金属器と思われる傷に、ノミ状の爪形をした刺突痕がある。これは大腿骨の正面に2つずつほぼ等間隔で並んでいるため、肉をとるためより、切断した足の正面に骨まで刺さるように、ノミ状の利器を打ち込んだものと思われる（図11¹¹）。つまり、肉を取るためであれば腱を切断するために骨端部に傷が集中するはずであるが、長軸に一定の距離をあけて散在することから、この傷は死体を単に傷つけることだけが目的だったと思われる（図12¹²）。この傷を観察している際、まだ生肉が付いたままであった太股を切り離し、その太股に一直線に

鑿で刺突を加えている情景が復元できる。このような死体にたいする扱いとして考えられるのは、五体満足にして放置すると、敵が蘇ると考えていたからと思われる。その根拠として時代ははるかに隔たるが、『古事記』の英雄たちが敵を倒す際、当然のように敵を切り刻む描写を挙げることができる。三浦佑之は敵がよみがえることを畏れて死体を切り刻んだのであろうと、ヤマトタケルがクマソタケルをずたずたに切り刻んで殺した場面を次のように解説する。「先の兄殺しもどうだが、肉体を切り刻むという後遺は、死者の再生を阻むために行われる。」（三浦2002『口語訳 古事記 完全版』文芸春秋社 p.196 脚注26）。

このノミ状の切り傷は人間を突き刺すためだけでなく、イノシシを解体するときにも見られ、殺人の



図1 居徳遺跡から出土した多数の傷を持つ人骨の一部。まだ説明のつかない傷が多く残る。



図2 居徳遺跡から出土した人骨の中に含まれていた成人女性の大腿骨（左）。

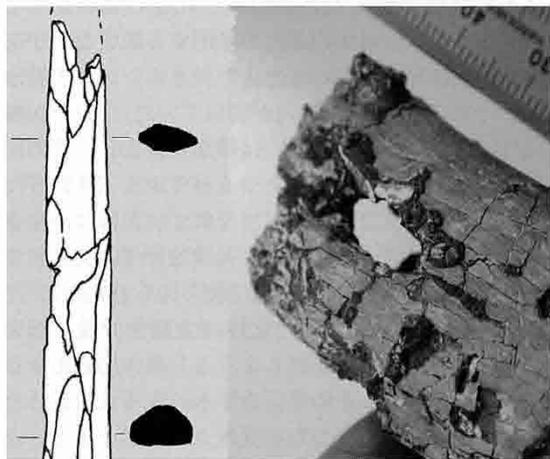


図3 図2の成人女性大腿骨の遠位部（体軸に遠い方）に開いた骨鏃の貫通痕と、古墳時代の遺跡から出土した骨鏃の実測図。

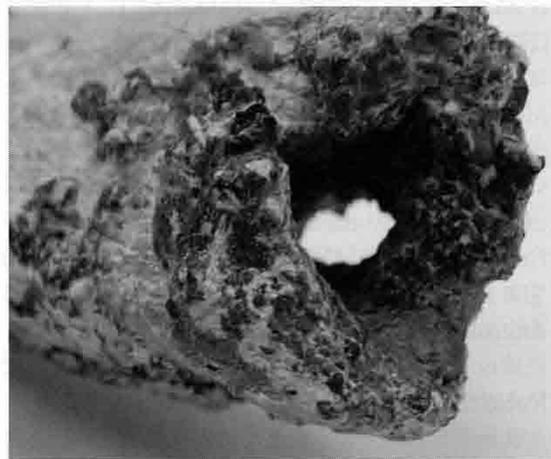


図4 骨鏃が大腿骨を貫通した際、大腿骨の裏側を吹き飛ばして突き抜けた跡。



図5 骨鏃が成人女性の膝を突き抜けた際の骨鏃の方向と位置関係。



図6 同じ場所から出土したニホンジカの焼骨。



図7 骨鏃が背後から刺さった焼骨の後位側の断面。



図8 骨鏃が貫通できず骨の後位面から刺さった骨鏃が前位側の骨を裏側から押し上げて瘤を作った様子。



図9 成人女性の大腿骨、近位側の太股の付け根に切り込んだ直線的な傷跡。



図10 その骨の裏側に観察できる切り込んだ傷跡。

ための武器としてだけでなく、日常生活の便利な利器として使われていたことが推定できる（図13¹³）。このイノシシの上腕骨の肘より少し上の腱が付着する部分に集中的に突き痕が見られるので、上腕筋を取る際についた傷だとわかる（図14¹⁴）。電子顕微鏡で観察すると、みな同じところに刃こぼれがあり、しかもその刃こぼれの形状が微妙に違うので、金属が貴重で道具の数も少なかったと思われる。

このように居徳遺跡出土の獣骨や人骨には、これまで他の遺跡では見たこともなかった。1) 骨を貫通した鏃による傷、2) 大腿骨を切断するための切り傷、3) 骨の表面の爪状の刺突痕、の少なくとも3種類の傷跡が見られた。このような傷跡はわれわれに改めて弓矢の威力の大きさを示し、縄文時代晩期に金属器があったこと、さらに他に類例の無い爪

形のノミ状の刺突具の存在を強く示唆するものである。また、人骨に残るこのような傷跡は、犠牲者に対する畏怖、憎悪を余すところ無く表していると、私には感じられる。これらの傷を観察し、犠牲者にふりかかった惨劇に思いをやるうち、私には金属器や他に類例の無い道具を携えて、どこかはるかな地から渡ってきた異人らの逡巡の仕業と読み取することは必ずしも荒唐無稽な筋書きとは思えなっている。

これらの人骨群の傷跡について、以下の出版物に正式報告がなされているので参考にされたい。

丸山真史・宮路淳子・松井章 2004「居徳遺跡群出土の動物遺存体について」『居徳遺跡群 IV 四国横断道（入野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター、pp211～240。



図11 別の成人骨（性別は不明）の表面に刻まれた鏃の痕跡。



図12 等間隔で刺突された大腿骨。



図13 同地点から出土したイノシシの上腕骨。腱の付着する部分に鏃の刺突痕が多数観察できる。



図14 イノシシ上腕骨に付けられた刺突痕の拡大写真。

人骨からみた戦い 弥生人骨と居徳人骨

中橋 孝博（九州大学）

遺跡から出土する古人骨からは、近年の分析技術の進歩もあって、非常に多彩な情報が引き出せるようになっていますが、ここではその内、骨につけられた傷に注目して、そこから古代の人と社会についてどの様な状況が見えてくるのかを少し考えてみたいと思います。

弥生時代の戦い－北部九州と鳥取県青谷上寺地遺跡

私はこれまで北部九州を中心に古人骨に関する人類学的な仕事をしてきたのですが、ご存じのように、この地は古来、大陸の人と文化に対する玄関口になってきた地域です。この地に大陸の先進文化がいち早くもたらされ、弥生文化が花開いて、その後急速に日本各地に広がっていったことは良くご承知の通りです。同時にまた、当地は全国でも例外的に弥生人骨が大量に出土する地域になっていまして、その研究結果は、この時代に大陸から流入した渡来人がその後の日本人の形成に重要な役割を果たしたことを明らかにしてきました。

当地の弥生人骨を詳しく調べていきますと、もう一つ、他の時代の資料ではあまりお目にかからない興味深い事例にしばしば出くわします。それがここで取り上げる、切られたり刺されたり、あるいは首を離断された例などです。例えば図1は、福岡県のスタレ遺跡で発見された、胸椎上部に石剣の切先が刺さった男性人骨（弥生中期）の例です。このような何らかの暴力行為で傷ついた人骨や埋葬例が、橋口達也氏〔福岡県教育委員会〕によればこれまで200例近く出土しています。

今回の居徳人骨の発表の際、新聞報道では「縄文時代にも戦争が・・・」というようなかたちで採り上げられ、議論を呼びましたが、研究者の中には弥生時代についても、当時の戦いはそんな「戦争」という言葉が当てはまるような大規模なものではなく、小競り合いに近いものではないか、という意見が消えていません。考古学や文化人類学で考えられている「戦争」の定義については、集団戦、ということが一つのキーワー

ドになっているようですが、果たして北部九州弥生時代の状況はどうだったのか。福岡県でも最大規模の埋葬遺跡である筑紫野市隈・西小田遺跡でそうした点を検討してみた結果、最も戦傷例の集中する弥生時代中ごろには、成人男子の半数以上が戦闘の犠牲になった可能性が浮かび上がってきました。事故や個別的な闘争の結果と言うよりは、やはりある程度の集団性を想定した方が理解しやすい状況かと思いますが、ただし、当地では戦傷例がほぼ成人男性に限定され、戦傷遺体も、他の通常の死者と同様の扱いで墓地に埋葬されています。この点で、例えば有名な中世の鎌倉材木座のように、女性や子供まで犠牲になって戦死者を大きな墓穴に雑然と詰め込んだ埋葬遺構が残される状況とはかなり異なっています。つまり、時には熾滅戦にまで進展した戦国時代の戦いなどとはその性格、内容において大きく異なり、北部九州の弥生社会では、戦いの多い緊張状態にあったとしても、まだ戦死者を通常の死者同様に埋葬するだけの秩序ある社会が残っていたのではないかと思います。

しかし同じ弥生時代でも、最近、鳥取県の青谷上寺地遺跡から、かなり激しい戦いの可能性を示す事例が出土しました。図2は、鳥取大学の井上貴央先生からお借りした写真の一例ですが、この遺跡では、新生児3体余りを含めて、少なくとも109体以上の骨が見つかり、その中で、少なくとも10個体以上、計110点の人骨に殺傷痕が確認されました。特に注目されるのはその出土状態でして、人骨は半ば水に漬かった溝状遺構から、関節がすべて外れたばらばらの状態で発見されました。ばらばらと言っても、ただし、同じ個体の骨がかなり近接して見つ

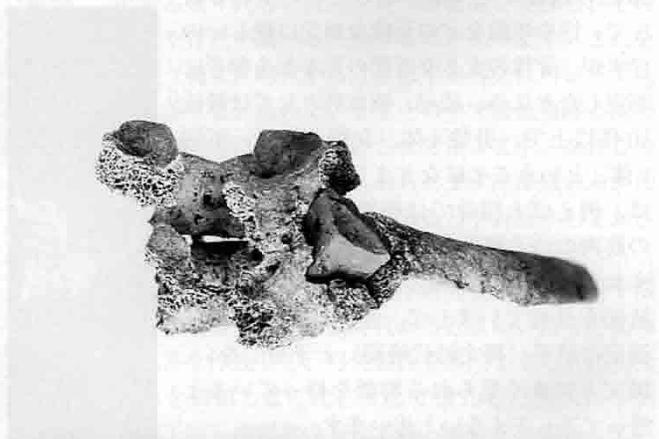


図1 福岡県スタレ遺跡弥生人骨

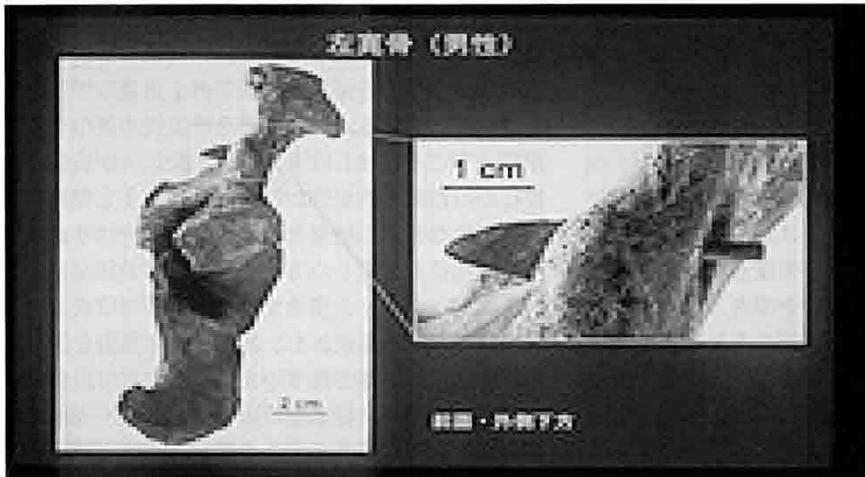


図2 鳥取県青谷上寺地遺跡の弥生人骨

かっておりますし、また動物の咬み痕がほとんど無いことなどから、おそらく当初からこの地点に積み重ねるようにして遺体が置かれ、その上に土をかぶせて埋葬されていたのではないかと推測されています。

ともあれ、北部九州での状況に比べるとかなり殺伐とした、いっそう激しい戦いを想起させるような例として、弥生時代の戦いと言っても、場所や時代によって様々な形がありえることを予感させる資料ではないかと思えます。

高知県居徳遺跡出土の縄文人骨

さて、今回の居徳人骨がこれら弥生の例と比べてどうかということですが、最初に基本的な所見を整理しておきます。居徳では、動物骨に混じって計25点の人骨が見つかりました。いずれも断片で、性や年齢などの正確な判定は難しいのですが、骨体の太さや断面の形などを参考に判定したところ、結局、個体数としては最低10体以上で、男性4体、女性が5体、不明1体、ということになりました。特徴としては、例えば大腿骨では粗線と呼ばれる後面の筋肉のつく部分が強く突出していますし、すねの脛骨は左右幅の狭い、扁平性の強い断面を見せていまして、全体的にC14年代測定の結果（縄文時代晩期）と矛盾しない、縄文人によく見られる特徴を持っていると言って差し支えないと思えます。

注目されるのは、この中で、4点、ないし

は5点の人骨に傷が見られたことです。傷については松井さんの方から詳しい紹介がありましたので、私は特に問題になるJ2人骨（女性の左大腿骨）について少し触れておきます。

私が注目するのは、この大腿骨の上端の傷でして、先ほども言われましたように傷口がかなり鮮やかで、薄く鋭利な刃で切られてい

ました。問題はその位置でして、左大腿骨の付け根近く、しかも腿の内側に深く、骨体の三分の二程度まで切り込んだ離断寸前の深い切り傷です。太腿の厚い筋肉のついたこの部分にこのような深い傷をつけることは、たとえ鋭利な日本刀を使ったとしても、そうたやすくはありません。たまたま足を開いていたときに刃が入った可能性は否定できないでしょうが、それにしてもよほど鋭利な刃でなければ、ここまで深く切り込む傷はつけられそうもない。そういうことを考えますと、あるいは戦いで偶発的に付いた傷というよりはむしろ、ある程度肉をはいだ上で刃物を振り下ろしたと傷、と考えた方が理解しやすいようにも思えます。要するに、当初、解体痕ではないかという意見もあったようですが、私もこの傷に関しては、その可能性が捨てきれないように思えます。

いずれにしても、どういう利器でこの傷をつけ



図3 居徳人の大腿骨につけられた傷

たのが問題です。この遺跡では黒曜石も出ているようですが、その切れ味が金属に勝るとも劣らないにしろ、ナイフのように押し引いただけでは、このように骨に深く切り込むのは困難でして、やはりある程度力を込めて振り下ろす動作が必要と思われる。そうなると、このような鋭利な切り口をつけられるほどの薄い石の刃物で、それが可能かどうか。そう考えると、一番理解しやすいのは金属製の利器でしょうが、しかし時代的にその想定も困難でして、今のところ謎と言う他ありません。

ともあれこういった居徳人骨の状況から、新聞報道であったような「戦争」が想起されるかという点、残念ながら私にはそうした明確なイメージを作り上げることはできませんでした。個体数は確かに10体以上あるし、鋭利な刃物で切ったり、矢を打ち込まれた痕などがあるのは事実なのですが、ただ、明確に人為的な傷と言える4例の受傷人骨片のうち、武器と思われるものでつけられた傷は一体のみで、あとは利器が良くわからない、図3にあるような刺したような傷です。しかもこのように骨の長軸に垂直の方向に傷が並ぶというのは、通常の戦闘ではまず付き得ない傷です。

全体的に見て、どうも傷のありようが、北部九州や青谷上寺地などに比べてかなり単調です。直接の戦闘痕と言えものが数の上でも、比率に於いても少ない。先ほどの女性大腿骨上端の傷にしても、戦いの中で付けられた傷というより、どちらかという点と解体痕に近いような傷が多数を占めるわけです。しかもこの遺跡では武器の破片も見つかっていません。

こういう状況で、居徳を集団戦の戦死者と言えるかどうか。狩猟採集の縄文社会でも、定住して人口を増やしていくような状況があれば、時には集団同士がぶつかり合うことがあっても別に驚きませんが、しかし今回の居徳についてそうした状況を考えるのが妥当かどうか、疑問に思います。ゴミ捨て場の様な場所にバラバラに捨てられていた状況からすると、いわゆるCannibalismの可能性も検討を要するでしょうし、結局、あれこれと疑わしい状況はあるにしろ、これで何らかの結論に結びつけるにはまだ飛躍があるということです。その前にまずは武器などを含む当時のこの地の社会背景についてもっと情報を集め、さらに事例を増やすことが先決問題だろう、という、最後は言わずもがなの言葉で私の話を終わりたいと思います。

実験考古学とGIS考古学からみた 居徳遺跡

宇野 隆夫（国際日本文化研究センター）

皆さま、こんにちは。実験考古学とGIS考古学の立場からの、発表をさせていただきます。

まず居徳遺跡で問題となる「戦い」「戦争」について、私の考えを最初にお話ししておきます。サルの集団から人類の近代国家に至るまで、色々な軋轢がありました。それを力で解決する行為を「戦い」と考えております。軋轢の種は色ありますが、資源争いが最も重要であると思います。食料は必須の資源ですし、男にとって女は資源であり、女にとっては男が資源です。人類社会はその資源の種類と量とが、大いに増えてくるところに、大きな特色があると思います。

「戦争は戦い的一种であり、その規模が大ききものである。しかしその境は峻別できるものではなく研究者の主観的判断に拠る」が私の基本的なスタンスです。例えば、国家がおこなう戦いを戦争と定義したとしても、古代における国家の認定そのものがかなり主観的ですし、戦いの実態に即しているとも限らないと考えています。

しかし研究者の立場によって評価は色々であると言うだけでは前に進まないのが、実験考古学によって、武器機能の客観的なデータを得たり、GIS空間解析を使って軋轢の背景を探っていくような作業が重要であると考えられるわけです。

まず実験考古学には色々な研究手法がありますが、その一つに出土物と同じ素材と技術を用いて、出来る限り同等の機能を持つ複製品を製作し、その性能や特性を調べるといったものがあります。これを縄紋（縄文）時代から近世に至る弓矢について実施して参りましたので、まずその中で居徳遺跡と関わりが深い所について報告させていただきます。なおこのプロジェクトは、ここにおられます赤澤威さんが仕掛けて推進された成果であることをお断りしておきます¹。

実験方法としては、考古学研究者が発掘資料や伝世資料に基づいて縄紋時代から近世にいたる弓矢の仕様書を作成して、弓矢製作を専門とする方に復元製作を依頼しました。そして復元した弓矢について、工学・情報学の方に実験・測定をお願いしています。

縄紋時代については福井県鳥浜貝塚からみつかった前期の弓を復元しました。これは縄紋時代としては珍しく、マユミという広葉樹を使った弓矢であり、長さ約1.2mです。また東京都下宅部遺跡という縄紋時代後・晩期の遺跡からみつかった、イヌガヤという針葉樹材を使った弓を4点復元しています。これには丸木弓と、漆や樹皮で強化・装飾した飾弓とがあり、性能の比較のために弭（ユハズ：弓の弦を張る部分）を弥生式に作ったものもあります。

弥生時代の弓については、しっかりした作りのもので、大阪府亀井遺跡から出土した弥生時代中期の、弓を復元しました。イヌガヤ材を使った長さ1.5mのもので、この頃になります。鏃（ヤジリ）は石の鏃に加えて、青銅や鉄の鏃も使いました。そこで鏃についても発掘されたものと同じ材料を使って、同じ大きさと重量、正確には極めて近い重量に復元したものを製作しました。

また弥生時代の弓として非常に特殊である佐賀県菜畑遺跡からみつかった短弓を復元しました。この弓は広葉樹のシイを使った長さ約0.8mのものであり、日本の先史時代における最強の弓と思われます。その矢としては菜畑短弓とほぼ同じ時期の長さ20cm近くもある長大な有蓋式石鏃を復元してい

ます。これは福岡県長野宮の前遺跡の支石墓（朝鮮半島渡来の墓形式）において実際に大腿骨に突き刺さって発見されたものをモデルにして作ったものです。

居徳遺跡を考えるために、縄紋から弥生という時期に絞って言いますと、佐賀県菜畑遺跡短弓のような例を除くと、当時の一般的な弓の発射力には大きな変化はありません。ただし弥生弓の弭は、弦を輪にして簡単にかけることが出来るようになり弦切れに迅速に対処できるので、戦いに使うには有利です。他方、弥生時代の鏃は、材質・重量ともに大きく変わりました。

弓の射法も性能に大きな影響を及ぼしますが、アフリカのボツアナ・サンのように、弓を体の前であまり大きく引き絞らないで獲物になるべく近づいて射するという射法があります。これに対して和弓では比較的大きく引き絞って射ます。銅鐸の絵画には、この両方の射法に似た絵画表現があります。

これからが本番なのですが、体育館の中や実験装置で発射実験をして、矢の発射時からの速度の変化を測定したり、使い易さを含めた弓の特性を測定したりしています。例えば、縄紋時代の飾弓の一つについて、矢の重量30g、弦を引く力を20kgの条件

表1 縄紋矢と弥生矢の威力

	鏃の材質・重量	クマ皮	ウシ皮	イノシシ皮	モミ板（厚さ1cm）
時速100km					
縄紋石鏃	黒耀石・1.6g	貫通（3.9cm）	跡が残るのみ	跡なし	割れる
弥生石鏃（1）	サヌカイト・3.3g	貫通（4.2cm）	貫通（1.2cm）	貫通（1.3cm）	割れる
弥生石鏃（2）	サヌカイト・8.3g	貫通（6.3cm）	貫通（1.9cm）	貫通（2.7cm）	割れる
磨製石鏃	頁岩	貫通（5.0cm）	貫通（3.2cm）	貫通（5.8cm）	
弥生銅鏃	青銅・3g		貫通（4.2cm）	貫通（5.0cm）	割れる
弥生鉄鏃（1）	鉄・3g	貫通（4.6cm）	貫通（5.1cm）	貫通（4.9cm）	割れる
弥生鉄鏃（2）	鉄・5g	貫通（5.7cm）	貫通（5.2cm）	貫通（4.4cm）	割れる
古墳鉄鏃（1）	鉄・12g	貫通（6.4cm）	貫通（4.6cm）	貫通（4.9cm）	割れる
古墳鉄鏃（2）	鉄・15g	貫通（4.8cm）	貫通（4.0cm）	貫通（5.0cm）	割れる
時速50km					
縄紋石鏃	黒耀石・1.6g	跡なし	跡なし	跡なし	跡が残るのみ
弥生石鏃（1）	サヌカイト・3.3g	跡なし	跡なし	跡なし	跡が残るのみ
弥生石鏃（2）	サヌカイト・8.3g	跡なし	跡なし	跡なし	跡が残るのみ
磨製石鏃	頁岩	貫通（5.0cm）	貫通（3.2cm）	貫通（3.0cm）	
弥生銅鏃	青銅・3g	貫通（3.5cm）	跡が残るのみ	貫通（2.5cm）	
弥生鉄鏃（1）	鉄・3g	跡なし	跡が残るのみ	跡なし	ささる（0.6cm）
弥生鉄鏃（2）	鉄・5g	貫通（3.8cm）	跡が残るのみ	貫通（1.7cm）	ささる（0.7cm）
古墳鉄鏃（1）	鉄・12g		貫通（1.1cm）		
古墳鉄鏃（2）	鉄・15g	貫通（4.7cm）	貫通（1.0cm）	貫通（2.0cm）	跡が残るのみ

で、測定すると、初速度は時速約136kmという結果を得ています。そして弓の材質と長さ太さなどによって弓の特性は色々であり佐賀県菜畑遺跡のシイを使った短弓などは特に強力ですが、縄紋・弥生時代の針葉樹を使った一般的な弓では、およそ初速度が時速100-150km程度であり、発射力には大差がないという結果を得ています。

従って、一般的な縄紋弓矢と弥生弓矢との性能の差は、主に鏃（ヤジリ）の違いに由来すると考えられます。そして2g前後の軽い縄紋矢を狩猟用、5g前後ある石鏃や青銅鏃・鉄鏃を装着した弥生矢を戦い・戦争用と考えることが従来の主流の見解でした。

考えるべき問題の一つは、弓の性能が変わりがないと、重い矢は軽い矢よりも初速度が遅くなり、射程距離も短くなることです。弓の条件が同じで、単純に軽い矢を装備した人々と、重い矢を装備した人々とが、遠くからゆっくりと間合いを詰めながら戦ったら、おそらく軽い矢を装着した人々の方が勝つのです。

このことについて考えるために、クマ皮・ウシ皮・イノシシ皮、及び弥生時代の盾によく用いた厚さ

1cmのモミ板を的にして、色々の鏃を装着した矢を、時速100kmと50kmとで射込むという実験をしました（表1）。

時速100km、すなわちかなりの至近距離からの射た場合には、弥生矢は石鏃・青銅鏃・鉄鏃がすべての種類の皮を射ぬいてモミ板を割りました。これに対して縄紋矢は熊皮を射ぬいてモミ板を割りましたが、ウシ皮とイノシシ皮は射ぬけませんでした。なお材料調達の都合からクマ皮とウシ皮は、なめしたものを使用しています。イノシシ皮は生皮を使い、クマ皮はイノシシ皮より強いので、縄紋矢は至近距離から射ても、クマの生皮を貫通できなかった可能性が高いと推定できます。

時速50kmすなわち、的から一定程度離れて射た場合には、矢の威力の差はやや複雑ですが、さらに大きな違いが生じます。石鏃は縄紋矢・弥生矢ともに的に対して有効な効果がなかったのに対して、弥生時代以後に出現した磨製石鏃や青銅・鉄鏃は、相当の有効性をもっています。ただし弥生時代の石鏃形の鉄鏃のみは軽量のためか、威力が石鏃と大差がないという結果を得ています。

以上から、同じ速度で矢を的に当てると、鏃の重量が重かったり金属の鏃を使うと、威力がかなり増すと考えられます。また高い櫓や土塁の上から下方に射かけるような場合には、重い矢が有利になることも容易に推定できます。

弥生時代の鏃資料を見ると、重いものばかりではなく、縄紋時代と変らない軽いものから縄紋時代にはない重いものまで色々ものがあります。そして弥生時代の軽い矢を狩猟用、重い矢を戦い・戦争用と仕分けるのではなく、軽い鏃から重い鏃までを一つのセットとみなしたら、新しい見方が可能かと思えます。

すなわち縄紋弓矢では大型獣を仕留めるのは難しかったと思いますが、弥生弓矢は軽い矢で鳥や小型獣を狩り、重い矢でイノシシやクマやおそらくシカを仕留めることができたでしょう。弥生銅鐸にはシカやイノシシを弓で射る絵画を表現しています。

また戦いに際しては、縄紋弓矢は遠くからの射かけ合いが有効な使用法ですが、弥生弓矢では軽い矢で遠くから射かけ合い、間合いを詰めて殺傷力の高い重い矢を射ることが可能です。また弥生時代には濠・土塁・櫓を備えた防御集落を盛んにするので、高所から威力のある重い矢を射かけることも多かったと思われる。

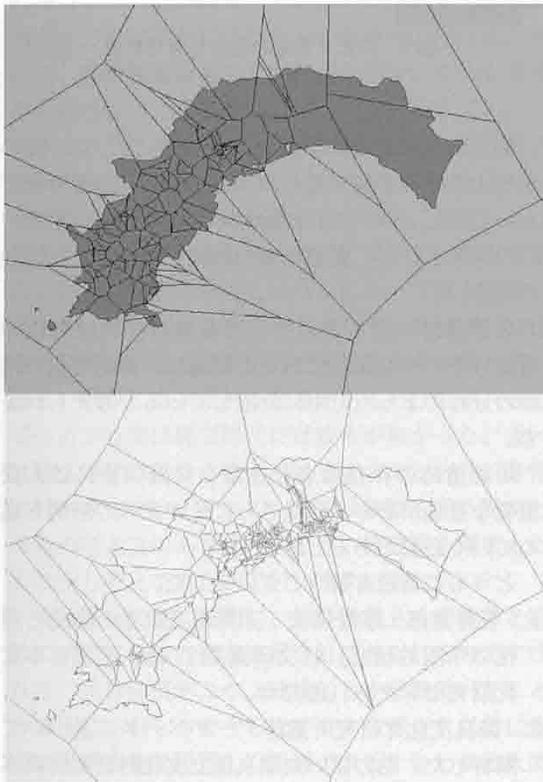


図1 高知県遺跡のボロノイ分割
(上：縄紋時代、下：弥生時代)

このように弥生時代の弓矢は、狩猟の道具としても戦いの道具としても、縄紋時代よりもかなり複雑・高度化したものと考えています。

それを歴史的にどのように評価するかということですが、弥生時代には中国において古典的な国家が成立して日本列島との間接的・直接的な交流が活発化しています。そして武器の複雑な分化や金属化、また戦術の高度化も中国中原地域を中心として進んだものです。弥生時代の武器様式は、中国の先進情報を日本列島で咀嚼して成立したものであり、弥生の戦いを戦争と理解しても大過ないと考えています。

居徳遺跡について述べますと、弥生時代の年代観が動いている今、矢が貫通したとされる大腿骨が弥生時代のものか縄紋時代のものかがまず問題でしょう。しかしいずれにせよ、当時の弓矢の威力から考えると、皮・筋肉を貫いて骨まで貫通するとすると、一般的な戦いの状況ではなく、射られた人が動けない状態で至近距離から射たものであった可能性が高いと思います。

次にGIS（地理情報システム）を用いた高知県の遺跡分布の解析結果について報告します²。まずいくつかの前提を申し上げます。

高知県はかなり険しい山地と、高知平野や中村平野からなり、地形のコントラストが明瞭なので、GIS解析に適しています。この空間の上で遺跡分布を解析するには、できる限り多くの遺跡を網羅して、年代を細かく仕分けることが望ましいことです。しかしここでは今得られているデータによって、縄紋時代と弥生時代の遺跡分布の大きな傾向をみるという方針で解析を行ないました。解析手法としては、ポロノイ分割（縄張り領域を復元する手法）と密度分布等値線（遺跡の分布密度を等高線のように表現する手法）という二つの方法を用いています（図1・2）。

縄紋時代の遺跡についてみると、高知県の中央部から西部にかけて、河川流域を単位としながら、海辺の平野から山地まで、まんべんなく遺跡が分布していると感じます（図1・2の上段）。

これに対して、弥生時代には遺跡の分布が高知平野に特に集中して、中村平野にも小さな中心ができていきます（図1・2の下段）。このような一極集中的な在り方は、古墳時代から古代律令国家の時期にかけてさらに強まっていき、中世には再び高知県下に広く遺跡が分布するようになります。

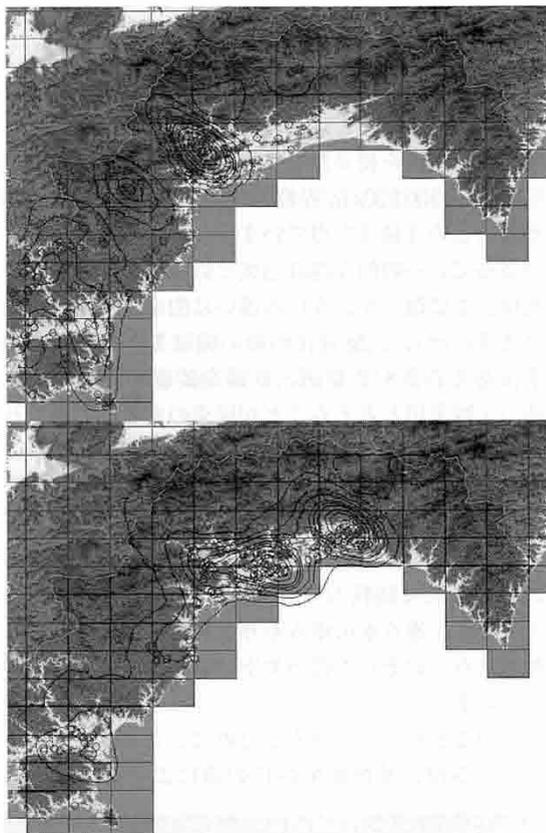


図2 高知県遺跡の密度分布等値線
（上：縄紋時代、下：弥生時代）

縄紋時代には比較的ゆったりと居住して、海の幸と山の幸を交易するというような在り方も可能であったでしょう。*これに対して弥生時代には平野中心の居住となり、資源争奪の契機も増加したと思われる。

居徳遺跡に戻ると、その存在地点が縄紋時代の遺跡分布の中心縁辺であると同時に、弥生時代の遺跡の分布のまったただ中に位置していると考えられます。

居徳遺跡の存在地点と豊富な発掘情報には大変重要な意義があり、今後さらにその意味の解明を進めていく必要があると思います。

どうぞ清聴有難うございました。

1. 石井紫郎・宇野隆夫・赤澤威『武器の進化と退化の学際的研究』日文研叢第27冊、国際日本文化研究センター、2002年。
2. 奈良文化財研究所遺跡データベースに基づいて解析した。助力頂いた奈良国立文化財研究所森本晋氏に感謝の意を表す。

縄文時代における戦争の動機と背景

小林 達雄 (国学院大学)

ご紹介に預かりました、小林でございます。

人間も地球上における生物の一員でありまして、いわば自然的秩序の中の1つの要素であります。そういった意味ではもちろん動植物とは大きな差異がありますけれども、一方では見方によってはですね、共通した、その行動だとか、或いはそういう行動を起こす動機やパターンなどに共通したものがあります。戦争というのもその性格は人間だけに見られるものではありません。つまり、まず戦争がどのようなのかという定義を人間の世界だけに限って考えることをやめにして、戦争を改めて捉え直すということになるか、ということであります。色々な戦いというのは、昆虫の世界にもある、もちろん植物の世界にもある。自分の種をどう相続していくかということについては、熾烈な戦いが、文化的な表現に過ぎるかもしれませんが、人や小動物、図体の大きな大形動物に至るまで、共通したものがあることに注目する必要があるのではないかと。その中で、人間が一方では確かにはっきりと戦争という行為において、特徴的な大きな差があるという、これも認めないわけにはいきません。

ミツバチもその襲ってくる外敵に対しては集団で戦いを挑んでいきます。そうではあるけれども、その行動は遺伝子に組み込まれた行動である。ところが人間の戦闘行為というのは、遺伝子に組み込まれていない行動であるという点において重大な違いがある。例えば、動機におきましても社会的、文化的、経済的、さらに政治的、宗教的、今イラクでの激しい戦争には宗教的な要素があるわけです。そして一方では実は縄文時代には戦争が無かった、或いは弥生時代以降から戦争がはじまったという、非常に分かりやすい、そして一方では議論も多く呼ぶところの考え方です。そういった話を踏まえた上で少し考えてみたいと思います。

実は今日の高知新聞に、福井勝義さんが戦争と宗教について1つの視点を示されておられるのですが、実は経済的とか、政治的とか宗教的ということとは別に、むしろそうしたアフォードンス以前に極めて人間自体に根差した動機による、いわゆる人間的、心理学的なそういう動機もある。心理的、心理

学的な動機というのはどういうことかという、そういうことをしないではいられないという衝動、あるいはある緊張感を自分達自らが作り出し、その緊張の解消の為に攻撃的な行為を他の集団に対して行うということがある。

ところで戦争の定義については、いろいろな考え方があって、相当な開きもある。本格的な戦争というのは弥生時代からはじまるんだ、それ以前の縄文時代には戦争が無かったという考えが広く受けられている。そこには動機における心理学的な面が少し抜け落ちているのではないだろうかという思いがする。例えば縄文時代の人たちと同じような文化或いは言語世界に生きる、太平洋を隔てて対岸に陣取って、あのトーテムポールを立てた人たち、この人たちはどちらかという弥生時代というよりも縄文時代と同じような文化的な内容をもっております。そして共に高度な充実したそして個性的な文化を創りあげておりまして、私は本格的な農耕を持たない東西の両横綱という風に位置付けておりますが、彼らも戦争をします。経済的な戦争もあります。例えば、奴隷を手に入れるためとかですね。そういったものもありますけれども、面白い部分ですね、損得勘定抜きで戦争というものが起こる場合がある。とくに、自分の領土を黙って通過する、ただ通過するだけでは全く彼らに損害は無いわけですが、それを許さない。で、挨拶がないということだけで戦争にもおよぶというのが少なくない。実は私たち子どもの頃にですね、隣の部落の人たちと戦い、戦争をしました。集団で。集団での応酬行為といえども戦争の一形態かもしれません。少なくとも模擬戦争ではある。そういったものを大人が率先して起こすと正真正銘の戦争となります。つまり人間の戦争の中には尊厳性を傷つけられるとか、そういうことがですね、極めて大きな動機となる、ということでもあります。で、色々問題を抱えておりますけれども、赤澤威さんの冒頭陳述の中で、戦争するものというのは、人類が狩猟というものを非常に重要な行動の1つの中に組み込んでいるけれども、その延長線上或いは出発点はそこにあるかもしれないというのがひとつの可能性として指摘されました。そういうところに戦争というものの道筋を辿ろうとされました。私は別の観点から戦争を考えてみたいと思います。

人類の歴史を大きく分けてみますと、第一段階、その第一段階というのがいわゆる旧石器時代に当た

る。その第一段階の旧石器時代というのは、遊動的な生活しておりまして、見た目にはゴリラやチンパンジーとあまり変わらない。で、そういうときには多少の衝突はあってもですね、先ほどの宇野さんの定義によると、争い、戦い、戦争という段階がある。そういった意味に対応する戦争的としての、極めて特殊な特徴というものが第一段階には無い。そして遊動的な生活というのは人類が自然的秩序の中の一員として組み込まれていた。ところが第二段階というのは実は、定住的な生活を、これは赤澤さんも指摘されておりますけれども、定住的な生活を営むようになったということは、自然界の一面を切り取って、人間が自分の為に自分のものとし、自分による空間を確保することです。そうなりますとですね、その領域を守るということで縄張りをここに自分が定める過程で、少なくとも潜在的な争いが生まれる。例えば縄文時代でも湧き水がとても豊富などころには大遺跡があったりとか、そういう色々な条件が大遺跡を支えております。だからそこから弾き出された集団は条件の悪いところに住みつくわけです。だからそうした場所取りの状況の中から戦いに発達したのです。また、トーテムポールを立てた人たちの間では、サケが一番よく捕れる場所というのは有力な集団が占拠しているわけです。そうした陣取り合戦があるけれども、その面積を拡大していくという方向には向いていきません。まずそれを確保することです。その確保するという点においてちょっと領分の横を通る、黙って横切ると、それに対してけしからんといって戦争がおこるといことがあるのです。

ところでその第二段階というのは、日本においては旧石器時代が終わって縄文時代に突入することを意味しますが、イラン・イラク方面での第一段階から第二段階への飛躍は、その土台が違います。つまり農耕を土台にしているのです。そしてムラが出現するわけです。ムラというのは、極めて重要な歴史的な人類史的な意義を有するものですが、日本列島においては農耕とは関係ありません。縄文は新石器文化であるかどうかということあまり問題にならない。その中近東のほうの第一段階から第二段階へ、日本列島における第一段階から第二段階へとそういう風に事情が違うんだということでありませぬ。新たに生活領域縄張りを持っている。縄張りを持っているということは、例えば土器の様式だとかですね、そういうきちんとした様式が見え隠れしな

がら、同じ集団領域をずっと何百年にもわたって維持・継続していくということがあります。

ところが、縄文時代が終わって次の弥生時代に入るといのは、まさに日本列島における第二段階から第三段階へと大きな飛躍の時を迎えるわけです。日本における第二段階から第三段階といのは、今度はその面積、自分達の居住する生活舞台としての領域の面積を拡大していくという、そういう明確な目的をもつ動機が入ってくるわけです。そういう動機は人類にとって避け難い不幸な動機であるというのが、私の尊敬していた佐原眞さんの考えです。そしてそこから戦争だというわけです。縄文時代の戦争との違いです。そういう領地を拡げていくということは、古墳時代以降になると今度は政治的にですね、クニ作りというものと結びついて戦争を引き起こすようになる。それ以降、植民地主義とか、いろんな意味での戦争の動機とその方法、戦術、手段、武器とかによって特色づけられる戦争のパラエティーが継起してきている。

縄文時代には縄文時代の中から生まれた戦争が確かにあった。戦争と関わって傷ついてきた人々は少なくない。そして先ほどの中橋孝博さんの話にもありましたけれども、埋められていた幾十倍もの戦死者がいたのではないかと。それから骨に達しないダメージを受けて死んだ人の数はものすごくたくさんいるわけだから、骨に傷がついた例が何%あれば、戦争の証拠になるというものではなくて、ゴキブリ一匹家に百匹という原理から見るとすれば、2～3例の傷ついた人骨があれば、何百人もの死者がいたことを物語るとみてよい。一番古いのは、早期の成人男性の愛媛県の上黒岩洞窟出土例です。と言うのはですね、シカの角でできた15cmくらいの、鹿角製の銚が、後ろのお尻に突き刺さっている。その後の縄文時代全般をみると、石鏃の刺さった上腕骨、打撲による頭骨の損傷例なども知られている。先頭においてはしばしば、右手で攻撃しながら、相手の攻撃を左手で防御して骨折したりする。トーテムポールを立てた連中の人骨にもその損傷の比率はものすごく高いのであります。

それから、居徳は非常に特殊な人骨の出方をしております、これは松井章さんからもお話がありましたように、もしかしたら戦争じゃないかもしれない。もしかしたら、奴隷かもしれない。例えば、こんな奴隷、俺の財産なんだから、俺の持ち物なんだからと一人や二人殺しても大して響かない。それぐ

らい俺は財産をもっているんだ、という風なそういう示威競争の為に奴隷を殺すということが、トーテムポールを建てた人たちの間でもある。そういう例をみてきますと、青森県三内丸山、これは縄文時代中期ですけれども、整列した墓があるのですが、一方ではやっぱり谷間から、人骨がバラバラの状態です。そういう意味で、バラバラの人骨の事情には複雑なものがある。そして頭の無いものが二体、千葉県県立市子と清水貝塚から出ております。あるいは腕の骨と足の骨を井桁に組んで、真ん中に頭の骨を置く例がある。これは、古いお墓を暴いて、そして埋葬し直したんだというような考え方がありますが、果たしてそうなのかどうか、儀礼的戦争の延長線上の襲撃としての儀礼的なことも考えられます。そういう例は沢山あるのですけれども、別の機会にということで、時間になりましたのでこれで終わりたいと思います。有難うございました。

高知県土佐市居徳遺跡群について

曾我 貴行（高知県立埋蔵文化財センター）

遺跡の位置と調査の概要

居徳遺跡群は、高知県土佐市高岡町に所在する。遺跡は1996年、四国横断自動車道建設に伴う確認調査によってその所在が明らかとなり、1997・1998年の2か年にわたって、25673m²の範囲について発掘調査が実施された。遺跡は仁淀川西岸の沖積平野に潜在する4つの丘陵（埋没残丘）と、その間に位置する低地部分にまたがって立地している。遺跡の範囲は東西約400m、南北約700mにわたり、遺跡の現地表の標高は9m前後である。縄文時代後期～中世の複合遺跡で、集落跡、祭祀跡、旧河道などの性格を有する。集落の本体部分は確認できなかったが、集落に接する斜面堆積層の広範囲な調査によって、50万点以上と推計される多量の出土遺物が得られた。また、旧河道や斜面地形を覆っていた粘土・シルトの堆積中には、潤沢に水分をたたえた低湿地環境が存在しており、木製品や動植物遺存体、漆塗り製品などの資料に対して、きわめて良好な保存条件を提供していた。

遺跡の中心時期は、縄文時代晩期と古墳時代である。縄文時代晩期の代表的な遺物としては木胎漆器・木製鋸・土偶・「居徳人骨」・大洞式土器をあげることができる。木胎漆器は蓋状の器形を呈し、外面に流麗・繊細な文様を朱漆で描く。木製鋸は、弥生時代以降のものとは異なる独特の舟底形の形状をなし、1点の木製鋸は14C年代測定法により790±15～25年cal BCの年代が得られている。県下初の土偶は頭部～上半身の破片で、残存長18.2cmの大型品である。人骨は大腿骨など25点が出土しており、うち数点については、矢の貫通痕や創傷痕・刺突痕などの人為的な損傷が認められる。1点の人骨から採取されたゼラチンコラーゲンから、14C年代測定法によってCal BP3210 - 3080年という結果が得られている。大洞式土器は、縄文時代晩期末の突帯土器と弥生時代前期前半の弥生土器とに伴出し、縄文～弥生移行期の広域な交流を示す資料として注目される。このほか、縄文晩期の土器・石器類が大量に出土しており、県下の当該期の調査事例としては画期的な成果といえる。一方、古墳時代に関しては、土師器・須恵器・手づくね土器・勾玉・土製模造鏡・木製品などの遺物が大量に出土しており、これらは水辺の祭祀行為に伴うものと考えられる。県下屈指の縄文晩期遺跡であり、同時に県下屈指の古墳時代祭祀遺跡である。

4D区・「捨て場」の状況

4D区は、北西から南東方向へ延びる丘陵の北東側斜面に接した位置にある調査区で、その大半が南西から北東へと傾斜する斜面地形をなしている。この斜面地形は沖積低地に埋没した丘陵（埋没残丘）の裾部に当たるもので、その傾斜は北東方向に向かって徐々に緩やかとなり、やがてほぼ平坦な自然流路域へと移行する。4D区の北東側には自然流路域に対応する調査区である4C区が隣接し、縄文晩期中葉～後葉初頭の旧河道から木胎漆器・木製鋸が出土している。また、かつて4D区の斜面上方にあった丘陵地形は、近代以降の削平のために現存しない。

4D区南部の現地表下約2m付近において、泥炭状を呈する黒色土層を検出した。同層は東西約12m、南北約20mの範囲に分布し、最深部では1mに達するほどの層厚を有する。そして多量の土器・石器に加えて、約3000点の獣骨類が、潤沢な水分を介した「水漬け」の状態を保たれたまま現代まで遺存し、出土した。またこの層の下面には、南西方

向からの急傾斜面と斜面下方の窪地が完全に埋没していた。以上のように、食物残渣である獣骨類をはじめとする生活廃棄物が、急傾斜面・窪地という地形を考慮して限定的に投棄されたと理解できることから、この黒色土層は選択性に基づいて形成された廃棄物の堆積層であると考えられ、すなわち往時の「捨て場」との位置付けが理解される。人骨はこの「捨て場」出土の獣骨類の中から、松井章先生・中橋孝博先生の手によって発見された。出土地点を記録したものでみる限り、人骨の出土位置にまともはみられず、散在した状況を呈している。

人骨以外の出土遺物は、縄文晩期土器、土偶、石器、獣骨類約6万点である。晩期土器は、粗製深鉢・精製深鉢と、黒色磨研の鉢・浅鉢等で構成される。粗製深鉢に刻目突帯文土器を少量含んでいることから、縄文晩期中葉～後葉に位置付けられるものと考えられ、当地では土佐市・倉岡遺跡を標式とする「倉岡式土器」に該当する段階のものとして理解される。約3000点の獣骨の中ではニホンジカが最も多く、ニホンジカ、イヌがこれに続く点数を占めている。そのほか、サメ類、ニホンザル、ヘライ、タヌキ、オオカミ、ノウサギなどが確認されている。

「居徳人骨」からみた居徳遺跡群

「居徳人骨」の特異性について、もはや私が記すべきことは何もない。また、「戦争」があったのかどうかについても、私の立場から記せることは何もない。「居徳人骨」とは、受傷した一群を含む25点の出土人骨であり、松井章先生の御鑑定によって、少なくとも「1人の人間が弓矢で足を射抜かれる」事態があったことを物語るのみである。そこに「平穏さ」の対極にある「もの」が多く嗅ぎ取れそうだが、ということまでは私にも理解できる。これが招かねばならぬ事態の結末であったのか、招かれざる事態による終局の絵図であったのか、私には分からない。しかしこの間にも、居徳遺跡群の中では縄文から弥生への動きが進みつつあったことは、「木製鋏」や、「大陸系の骨角器」や、「金属器使用の可能性」や、「食用とされたイヌ」や、「イノシシ家畜化の可能性」などの事象から十分に窺い知ることができる。それと同時に、東日本地域の縄文土器文化の影響を直接的に受け入れ続けていたという、ある種の「二面性」のような色彩が私にとってはとても強烈な印象である。

小林達雄先生は御講演の中で、「ゴキブリ」1匹、家に100匹」という例えを用いられた。「考古資料とは、幸運にも現代まで消えずに残り得た、当時の生活文化遺物のほんの一部であり、その背景にはたくさんの消滅したこれらのものが存在するのだ」という、考古資料のもつ特殊で重大な側面を説き導く、尊い御指摘である。居徳遺跡群の事例とは、故人にはまったく失礼であるが、まさに「1匹目のゴキブリ」であろうと、私は考えている。わずか1例から事例本来の総量やその出現頻度を掴むことは、きわめて容易でないことであるが、「1匹目」の発見は、間違いなく「2匹目」発見の時期を飛躍的に早めることにつながっているだろう、と想像している。それにしても、「前例のないところに初例が見つかる」という事態は、「初例について2例目を追加する」という動作とは比較にならない各種「飛躍」を伴うということ、今回ほど痛く実感したことはない。

謝辞

今回の高知県における学会、ならびにシンポジウムの開催は、その開催地に住む者にとっては望外の向学機会・聴講機会の来臨であり、当地の関連分野における学史上の大きな事績となりました。最後とはなりませんが、学会、ならびにシンポジウムの開催について御尽力賜りました、福井勝義先生をはじめとする日本ナイル・エチオピア学会の先生方、御講演を賜りました5人の先生方、種々の御協力を賜りました関係者の皆様に対し、深甚の謝意を表します。



図1：40区「捨て場」完掘状態（北東より）



図2：調査



図3：「捨て場」の土層堆積状況（北西より）



図4：縄文晩期土器出土状態



図5：鹿角出土状態



図6：イノシシ下顎骨出土状態



図7：人骨の出土状態